

(地域紹介レポート3)

開発途上国におけるキリスト教会の礼拝  
—— 技術協力スタッフの体験から —— (その2) <sup>\*1</sup>

西 川 芳 昭<sup>\*2</sup>

— Church Service in Developing Countries —  
— Experiences of a Technical Cooperation Staff (2) —<sup>\*1</sup>

Yoshiaki Nishikawa<sup>\*2</sup>

1. はじめに

クリスチャンにとって、聖日礼拝（普通は日曜日・イスラム地域では金曜日に行われることも多い）に出席することは、過ぎた一週間の地上の生活に対する神様の守りを感謝し、新しく始まる一週間の生活に対する神様に導きを期待し、神様の前に同じ主を信じる人々と聖書の言葉に耳を傾け、礼拝を捧げる大切なひとときでしょう。しかしながら、実際に海外での仕事を行うときには時間の効率が優先され、日曜日は移動日になることが多いのが現実です。滞在が二週間以上になるとさすがに間の聖日には休息をとることが許され、よほどのことがない限り礼拝に出席できることになります。

本稿では、国際協力の現場スタッフとして仕事で訪れた地域の紹介と業務の背景・内容を縦軸に、キリスト者としての異文化紹介の視点を含めた開発途上国・地域におけるキリスト教会の聖日礼拝の出席体験を横軸にして、自らの体験を中心に、いくつかの例を紹介します。第一回のアフリカに続いて、第二回の今回取り上げる地域は南米、事例としてコロンビアとペルーを紹介します。

アフリカやアジアのような他の開発途上地域が多民族、多言語、多文化という多様性が目立っているのに対して、南米というとインディオの在来文化とローマカトリックという外来文化が混合した統一的な文化圏で、原語についても一部を除い

てはスペイン語が支配的になっており、比較的統一性の高い地域と言えるでしょう。実際現在人口の85%以上がカトリック信徒だと言われています。16世紀にイベリア人による南米大陸の征服とともにカトリックの布教も実施されました。その結果インディオは名目的キリスト教徒となり後の教会による異端審判による民衆宗教の弾圧へとつながって生きました。その一方で、有名なバルトロメ・デ・ラス・カサスなど異文化理解を示して本国の教会に抗議の手紙を送った優れた宣教師も生まれました。

19世紀に入ったプロテスタントは遅れたカトリックに対する近代的なものとして期待を持って迎えられましたが、多数派となることはありませんでした。

開発の問題を考える時に南米で起こった開放の神学について知らずには済まされないでしょう。

1968年にコロンビアのメデジンで開催されたラテンアメリカ司教協議会において、社会や政治に対する教会の態度が明らかにし、これに基づき、カトリック教会が真に福音的であるためには、貧しい人のことを考えねばならず、ラテンアメリカの構造的な暴力に対して、教会が、精神的な開放だけではなく、抑圧する側も抑圧される側も開放されなければならないとの主張が行われました。

このような中でプロテスタントの教会は、基本的には教会が直接政治的な行動を起こすのではなく、識字教育や医療活動を通じて地域社会に貢献

<sup>\*1</sup> Received December 19, 1997 <sup>\*2</sup> 長崎ウエスレヤン短期大学助教授 Nagasaki Wesleyan Junior College, Isahaya, Nagasaki, Japan 854-0081

する独自の歩みが続けながらも、常にカトリックとの関係を吟味しながら伝道を行ってきました。

## 2. コロンビアの教会

コロンビアには、主要都市の病院の設備を改善するための無償資金協力の事前の調査のために1996年2月に出張しました。コロンビアは南米大陸の北端に位置する面積が日本の約3倍の国ですが人口はわずか3,400万人ぐらいです。歴史的には、昔からインディオが住んでいましたが、コロンブスのグループに発見されて以来黄金郷として征服者らの目標となり、1717年にはスペインに占領されました。1819年には現在のベネズエラ・パナマ等を含む地域とともに大コロンビア共和国として独立し、その後分離し、1895年に現在のコロンビア共和国になりました。一人当たりのG N Pは約1,400ドルと最貧国ではないものの決して豊かな国ではありません。さらにこの国の経済は麻薬を中心としたアングラの部分が多いと言われ、麻薬がらみで外国人の誘拐や暴動行為に加えて反政府ゲリラも多く活動を続けています。そのなかでわが国からは多くの技術協力専門家が派遣され国内の各地で技術移転の仕事をされています。地形的条件から各地域が独立色が強く、それが地域格差につながり国土の均衡ある発展が遅れていることが経済社会開発の大きな課題となっています。

私の滞在に関しても、時のマリア・テレサ・フォレロ保健大臣との会見が予定されていたこともあり、常に銃を持った大統領府のS Pに警護されながら調査を行うという異様な雰囲気の中で2週間でした。日本が無償資金協力を行うのは原則的に最も貧しい国に限られており、比較的貧しさのひどくないコロンビアには初めての一般無償資金協力の調査団で、コロンビア側の対応は熱心そのもので直接保健大臣との会見を2回行われました。大臣は教会の関係する私立の病院へも協力を期待されていたのですが、私のほうから現時点では日本のシステムでは、供与された機材の管理責任等の問題から原則的に国立の病院にしか協力出来ないことを説明したところ、自らが私立病院に対する何らかの措置を考えることを表明され、私たちの方

針を納得して頂きました。さらに、近年始まった草の根無償を説明し、総合的な医療援助のあり方について意見を交換しました。そのうえで、大臣からはコロンビアの医療状況改善に対する願いと日本に対する期待を具体的にお聞きすることが出来ました。コロンビアは開発途上国の中では比較的医療施設が整っているのですが、それでも地方の中核病院では医療機材、特に乳幼児のための機材が不足しており、十分な医療が行えない状況であることを現場調査を通じて知らされました。日本が協力する予定の病院の技術能力・管理能力はかなり高いことがわかったのですが、レファレル体制として、一次医療の診療所に来訪する貧困層がかなり重症になってから患者が訪れるのが実態のようで、軽度の医療サービスを行う保健所や小医院の整備と連携の必要性が感じられました。さらに、妊娠中絶が宗教上禁止されており、その結果多くの非合法の手術が行われ母体も危険にさらされているとのことでした。地方都市にもでかけ、いくつかの病院を調査しましたが、特に治安の悪い地域では救急病棟に銃で撃たれた人がかつぎ込まれるのを目撃したりして、自分がテロと犯罪の街にいることを実感させられました。

そんな中で滞在中の日曜日には礼拝に出席することが出来ました。ホテルで聞いてもカトリック以外の教会が存在することが理解してもらえず、プロテスタントの教会がないのではないかと不安になりかかり、ましてや英語で礼拝をしているところを探すのは無理かと考え始めました。その時に、雇っていた運転手が機転を利かしてくれ、外交官の集まる地域の門番に何人か尋ねてもらい、何とか教会にたどりつきました。

ボゴタユニオンチャーチと呼ばれるその教会はどっしりとした石造りの教会でコロンビアに住んでいる外国人が主な出席者のようでした。200人は入れそうな会堂に100人ぐらいが集まっていたのでしょうか。オルガンの調べとともに礼拝が始まりました。旧約聖書からは歴代誌第一29章からダビデが「自分が進んで捧げるすべてのものは神様から出たものである。」と告白するところが朗読され、新約聖書からは第二コリントから「蒔く人

に種と食べるパンを備えて下さる方」についての朗読がなされました。日本の聖歌で言うと225番の「あらしにわが世と」と299番「みちびきたまえ」の賛美に続き、マルコによる福音書12章からメッセージが語られました。レプタ銅貨2枚を捧げた人の話しを通じて自らの姿を改めて問われました。すでに安定している職場と思われる国際協力事業団を退職してキリスト教信仰に立った開発教育と実践の連携を目指す決心はしているものの、全てを捧げることと、何かを離そうとせずつかんでいる両面を持つ自分に、ボゴタでのひとときに神様が語りかけて下さった瞬間でした。ちょうどその時の牧師は以前に牧師から公務員に転身し、その後ボゴタの教会が無牧になったために助っ人で来られていた米国人で、必要に応じて必要とされるところへ遣わされる姿勢にも触れることが出来ました。礼拝堂を出たところには私の外出に同行していたS Pが二方向から私の行動を監視していました。実際彼らが私を保護しようとしているのか監視しているのかは最後までわかりませんでした。プロテスタントの教会は進歩的（又は反政府的）と見られている南米において、外国人の私がそのようなところに入出入りすることを彼らは大統領府にどのように報告したのでしょうか。

コロンビアには前後二回出張しましたが、二度とも日本で親しくしていた農業研究者のご家族が住んでおられる首都ボゴタから飛行機で一時間ほどのカリという町を訪ねることができました。治安の悪い中、小学生の子供を伴っての生活には一時的な訪問者が測り知ることのできない緊張感があることと思いましたが、ご自身達もこのような環境下でこそより一層神様によって生かされていることを実感出来ると告白されており、自らのいい加減さを問い直される訪問となりました。

### 3. ペルーの日系人教会

次にペルーの日系人教会について紹介します。1995年3月に訪れたのがペルーの首都リマにある日秘福音教会です。ペルーというと記憶に新しいのは日本大使公邸占拠事件でしょう。本節では最初にペルーという国のことと仕事の内容、次に私

の礼拝体験を述べ、最後にその占拠事件についても触れたいと思います。

ペルーは、1899年から始まった移住者が現在約5万人の日系人社会を形成しており、経済・文化両面での日本との関係は深く、現大統領のフジモリ氏が日系二世で、多くの国民が日本に親近感を抱いています。ただ、経済的な理由等から一時テロ活動が激しく、91年に日本人農業技術者3人が殺害され、しばらく日本からの青年海外協力隊員の派遣が中止されたりもしましたが、私が訪問した頃はかなり治安状況は好転していたようです。それでも、滞在中要人と行動をとるとなるときはガードマンが同乗した防弾車で移動することになり、それなりの緊張感のなかでの滞在でした。

歴史に興味のある人にとっては紀元前まで遡れる様々な文明、特にチャピン・モチカ・ナスカなどの遺跡、12世紀まで遡れるインカ帝国のクスコやマチュピチュの遺跡が思い浮かぶでしょう。この文明は1531年スペインの侵略のためにあえなく崩壊し、1823年の独立までペルー地域はスペインの支配下におかれていました。さらにペルーは音楽の好きな人ならフォルクローレの調べを思い浮かべる魅力のある国です。アンデス山脈を越えたところはもうアマゾン川の流域であり、広大なジャングルが広がっています。

このペルーの首都リマの郊外にある国際バレイショ研究所で開催された国際農業研究協議グループの技術諮問委員会に援助国代表として発言権のあるオブザーバーの立場で出席することが私の役割でした。コロンビアから乗ったアエロペルーの飛行機が3時間遅れ、リマの空港に着いたのは午前2時を回っていましたが、研究所のスタッフが空港に迎えにきて下さり何とか無事に入国できました。会議では、世界中で問題になっている食糧安全保障の問題や環境保全の問題に国際的な研究所が連携して何ができるのか、先進国の役割は何か議論されました。この時大使館で長時間にわたり、国際農業研究に対する日本の役割についてお話しをお伺いした青木大使がその後あのような事件に巻き込まれるとは全く考えもしていませんでした。

この会議の間に国連の飛行機で標高5,000mのアンデス山脈を越えてワンカヨという約4,000mの高さの村にあるバレイショの遺伝資源を保存している農場を訪れました。ここはゲリラ組織に村人達が焼き出されたところで当時も多く農家が無人のまま残っており、研究者も日没までには必ず首都に戻ることが義務付けられていました。国連の飛行機だからゲリラも滅多な手出しはしないだろうと、素人考えで安全だと判断して、日本大使館の危険な地域だから行かない方が良くという忠告にも関わらず現地に行ったのですが、主要先進国の外交官や代表が乗っているのですから、考えてみれば誘拐するのに最適のグループであったかも知れません。ただ、植物の遺伝資源（バレイショは種子で保存することが難しいため今でも毎年イモを作りながら品種の保存が行われています。）を畑で保存している現場を見ることが出来る機会を逃したくないという好奇心には勝てませんでした。しかし、現場を訪れたことによって、何人かの犠牲者を出しながらも、危険を承知で最良の安全措置をしながら行われているこのような地道な研究活動によって、これからの食糧確保に絶対不可欠な遺伝資源が守られていることを実感することが出来ました。戦乱で失われる遺伝資源の多さはルワンダの内戦の時も問題になりましたが、ルワンダのトゥモロコシはメキシコなどで保存されていた種子を用いて元の農業を再建する努力がなされています。

それまで南米大陸には足を踏み入れたことがなかったのですが、中学生の頃エクアドルから放送されているキリスト教放送「アンデスの声」を聴取していたこともあり（今でもコールサインの後にマリンバの奏でる「さくらさくら」の調べに合わせて放送が始められたのを記憶しています）、是非一度南米の日系人教会に出席したいと願っていたのが、20年後に叶いました。ちなみにこの放送は南米におけるプロテスタント伝道に大きな役割を果たしており1931年から開始されています。

教会については、日本を出るときは何の情報もなかったのですが、いつものとおり現地で何とかなるだろうと思い、リマに着いてから「教会・教

会」と叫んでいたら、元ペルーの青年海外協力隊員が「神父か牧師か知らないけれども、日本人の教会の先生がいるよ。」と紹介して下さったので早速電話をしてみました。田口先生とおっしゃる牧師は「日本語とスペイン語の両方でやっているから心配しないで是非礼拝にいらっしゃい。」と招いて下さり、聖日は牧師自らが車でホテルに迎えにきて下さり、日本人、日系人及びその家族の人たち40名ぐらいからなるバイリンガルの礼拝に出席することが出来ました。一般的な治安の悪さは教会が鉄柵のようなもので覆われていることから推測出来ました。「教会から盗るものなんてないと思うかも知れないけれど、運び出せるものは何でも持って行かれてしまいますから防御手段を講じるしかない」とのことでした。

礼拝の賛美は牧師婦人が一節毎に日本語とスペイン語と交互にリードされていました。私もわからないなりに（スペイン語の発音は簡単ですので読むことはできます）聖歌461番「ながしたまいし」の繰り返し部分をスペイン語で歌って少しは現地の人たちの賛美に触れ、このような賛美を通して民族や文化を越えた主にある群れの一員であることを体験出来たのは感激でした。

メッセージは牧師が日本語で語り、バイリンガルの二世の姉妹が丁寧に感情をこめて通訳されていました。Ⅱコリント12章からのメッセージで、長所（タラント）と短所のあるのが人間であり、長所だけでは高ぶってしまうところを短所をも用いて下さるのが神様であることを学ばせて頂きました。私の体の弱さも、私が高ぶらないで、用いられることが出来るための備えかも知れません。

礼拝のあとは多くの人が片言の日本語で話して下さったり、私が農業に興味を持っていることを知ると戦前からの移住者の方がペルーの作物（バレイショはペルーの原産です。）についていろいろと話を下さったりして、交わりの時を持ちました。ホールでは、礼拝のあと、阪神大震災義援金のためのバザーが行われ、太平洋の向こうで日本のことを祈り、具体的に助けようとして下さっている教会があることを、是非日本の教会に伝えなければと思われました。

田口先生のお話によると、ペルーは南米の中でも最も移住の歴史の長い国の一つであるのに、14年前に先生が宣教師として入られるまではほとんど教会の群れらしい群れはなく（以前はあったそうですが）一からのスタートだったそうです。

12年目に会堂建設を実現し、私の出席した礼拝では日系三世の副牧師が正式に教会のメンバーとして受け入れられた証しをされるまでに教会が成長していました。最近まで、多くの青年が日本に出稼ぎに出ており、その人達の帰国後の霊的なフォローが必要とされています。

牧師の当初からの願いは、宣教師がいつまでも宣教地に居続けるのではなく、現地出身の牧師が立てられ、教会がその人を支えられるようになり、宣教師が必要なくなるということでした。神様が確かな祝福を与えておられるように感じました。

又、先生自身がそうであるように（保守バプテスト湯沢教会が中心になって派遣）一つの教会が一人の宣教師を支えるような海外宣教が、日本の教会でなされていくことも願っておられました。

宣教師にとってその教会が母港となるわけで、宣教団体からの派遣とは違った形で宣教師にとっても教会にとっても神様の恵みとチャレンジを受ける形と言えるかも知れません。最初、宣教師として奉仕されたのはエクアドルの伝道放送（PBA）の奉仕だったのですが、その後ペルーに移られてからは、湯沢教会が中心になってサポートし、事務局も教会に置かれています。

先生の二人のお嬢さんのうち上のみのり姉は、一時テロ活動の激しかったペルーアマゾン地域にアメリカ人のご主人と宣教師として入っておられます。今までは、ウィクリフのグループが多くの宣教師を送っており、宣教師の子弟教育の場もあったそうですが、現地の言葉であるケチュア語の聖書がほぼ完成したため、今はそのような教育施設がなく、今後お子さんの教育の問題が、治安上の安全と共に祈りの課題となっていました。近況では第二期の奉仕を終えてしばらく米国に帰国されるようです。

次女の真樹子姉は当時東京農工大の大学院で学んでおりましたが、現在は卒業して国連食糧農

業機関に入られ、ジンバブエのプロジェクトを担当されているようです。私自身がジンバブエが一つの研究フィールドであること、クリスチャンとして専門技術を生かして仕事をするなど共通する部分も多く、今後の交わりを期待しています。

礼拝後、昼食に誘って下さった先生が、途上国宣教には「へりくだりとほらくだり」が必要ですよとおっしゃった笑顔が印象に残っています。神様に委ねることはクリスチャンが存在していく上で最も重要なことですが、それとともに、健康が守られることに神様の特別な配慮があることを覚えることが出来ました。

精神的、肉体的疲労にもまして、このような素敵な出会いが体験でき、それを日本で分かち合うことができることが、海外で仕事をさせて頂く素晴らしい恵みと信じます。

ここで報告が終われば単なる現地報告なのですが、これには後日談があります。1996年も押し迫った12月17日（日本時間18日）、世界中を大きなニュースがかけ巡りました。ゲリラ活動が治まってきたと思われていたリマにおいて、日本大使公邸が襲撃され天皇誕生日のパーティーに集まっていた多くの人が人質に取られたのでした。

パーティーのホストである青木大使はもとより、多くの援助関係者が含まれていたため知人・友人の名前を人質リストの中に見つけ心配していたところに田口宣教師夫妻も混じっていることを知ったのは翌日の朝でした。すぐに支援教会の湯沢教会に連絡したところ婦人は開放されたが宣教師は引き続き捕らわれているとのことでした。

数日で宣教師は開放されたのですが、その間にあった聖日に公邸の中でクリスマスの礼拝が持たれ、カトリックの司祭がスペイン語でミサを行うのと並行して、日本語の祈りが捧げられたとのことでした。カトリックの国に日本人の宣教師が派遣され、大使公邸で極限状態の中で礼拝が捧げられたことの持つ意味は大きいと思います。宣教師が開放された後も多くの日系人を含む教会関係者が人質に残り、田口宣教師もご自身の疲れからの回復よりも公邸の中に残っておられる方達の安否

を気遣っておられました。

人質事件が解決したあとの手紙で、田口宣教師は、武力突入したフジモリ大統領の「これ以外に手はなかった」という言葉を引用し、ペルーの抱える問題を訴えるとともに、「この方以外には、だれによっても救いはありません（使徒4の12）」の聖書の言葉の重みを強調されています。

97年の田口宣教師夫妻からのクリスマスカードには先生が開放された翌日の家族写真が同封されていました。先生のやや疲れた顔を囲むご家族の笑顔が印象的です。ウエスレヤン短大でもニュースで田口宣教師が人質の中におられることを知った瞬間から、学長以下有志がその状況を気にかけており、開放後ねぎらいとおなぐさめの電話をしました。このような世界の隅々でおこっている事柄に意識を傾け、祈りをともにしていきたいと願わされています。特に大使館員を始め多くの駐在員が事件後帰国した中、引き続き現地での活動をされているご夫妻に神様の守りと導きを祈るものです。

#### 〈参考文献〉

クリスチャン新聞 1997年1月5日

「新キリスト教辞典」 いのちのことば社 1991

「最新世界各国要覧 8 訂版」 東京書籍 1995